宗教研究三九三号
（日本宗教学会）
抜刷
一九一八年二月三〇日発行

食行身禄の『添書』をめぐって

― 彼が富士山で自死した理由―

大谷正幸
『宗教研究』92巻3輯（2018年）

大谷正幸

行行身禄の『添書』をめぐって

彼が富士山で自死した理由

（論文要旨）

行行身禄（一六三一～一七三三）は行行系富士信仰五世代目の行者である。富士山で自死を遂げるまで彼には三点の著作があり、本稿は最後の『添書』をと呼ばれる無題の著作に関する考察である。『添書』は享保十八年（一七三三）正月に書かれたと考えられる。《添書》の目的は天子と将軍へのメッセージ、そして行行の自死予告である。十七歳から師・月行の富士信仰を自らのものとしていくが、それは同時に、深化する宗教観に対して何と神威の顕現が起きない現実で一 "{キーワード}"食行身禄（一六三一～一七三三）は、行行系富士信仰に属する行者で、開山と呼ばれる祖・角行藤仏（一五四一～一六四三）から数えて五世代目にあたる。食行は享保十八年（一七三三）に富士山にて自死した人物として知られている。本稿は、将軍や天皇へのメッセージであり、そして自死を予告した『添書』と呼ばれる無題の著作を通じて、自死の理由を論じようとするものである。
私が角行系富士信仰と呼ぶ一派は角行によって始める。この一派は神道・仏教・修験道といった既存の宗教から単語や概念を取り入れて自らの宗教世界を造り上げたもので、本質的にはそれらのいずれにも属さない。角行によって創られた創唱宗教であるといえ得る。彼らは自ら作つた文字や単純な描線を組み合わせて富士を表

象したものを護符とし、また日本語ではあるが意味の取れない唱えごとや神名を案出して実践した。食行は三世代

の流れで、二十二行の実子も行者だったことから、当時の宗教行政に組み込まれなかった。人穴や白糸の滝（いずれも静岡県富士宮市）を修行の拠点とし、角行を除けば、多くは江戸の町人として日常を過ごしていた。教団や講を組むこともなく、行者本人の周囲には場面によって信徒や弟子になり得る知人や家族がいたものである。兄弟弟子すらも独自の

にそのようなものはあると思われる。食行も、伊勢の山村で農家の三男として産まれ、十三歳で江戸の親類がいる商家に奉公を出ていて、まず無視をされて接していたらしく、本稿が主に扱う享保年間（二七六ー二三三）では江戸街

で食行は、『此かきもの武本とこのうた一冊』（此とおり）と郷里への書簡に書いたように、三十三の著作

を刊行する。
食行身禄の『添書』をめぐって

あった。師・月行から受け継いだ世界観を敷衍した享保十三年（一七三八）の『十二不説お開き身禄く之訳書』に下決定。そして本稿で取り上げる無題の著作である。無題の著作は、この書簡が書かれた享保十八年（一七四三）以前に
かつ江戸で打ちこわしが起きた前後、即ち同年正月ごろに成立したと推測される。
この最後の著作は先の書簡と同様である。そこで、この文字が無題だったことから、何世の写本の本が無題だったことから、確実である。後世、食行を『元祖』と仰ぐ角行系の著者はこの著作を『添書』と呼んだ。例えば、富士講に示された教義メモ集成『小泉文六郎覚書』は、一八四九年の御筆物を詠んだ。この著作の作者は『添書』を『三』に添えられたもの、いわば『三』のサブテキストとして認識していたようにみえる。現代の研究においても、『たかつて両者の内容は、『十二不説の巻』の神話的な部分、『添書の巻』の武家政治哲
言の部分を除くと、身禄が説く所は二著ほぼ同じである。ということ、そのような認識を延長上にある。あくまで自
食行の著作三種は、それぞれに彼の思想上の変遷を如実に映し出している。『十二』は、月行が元禄元年（一六八
八六月十五日、修行中に神から得た『身禄の世』なる歴史説や神話を受け継いだ、彼なりに神々による世界の創
造から説き始められて神代「身禄の御世」が何処なるものかを叙述している。二字が執筆された時点では、神代が月行同い、即ち師の門下に託されたものとされており、そこで食行本人が単独で何かをするという意識を強く見ている。観察の一端では、自らや近親者の詠む和歌と、食行が数え六十歳を迎えた享保五年から翌年の近況を描かれている。享保三年に月行が没して久しく、食行は師の遺説を基に単独の行者として自覚を持ったようである。なお、食行は、神保登の時から「身禄の世」が始まったことについて、朝廷から彼にお尋ねが来るものだと考えていっていた。しかし、現実にはそうならなかったので、元禄十二年から三年続けて正月になると京の関白邸へ出向き、「身禄の世」を取り上げるべきよう願願したが、いずれも門前払いに終わってしまった。食行もそうしたお尋ねが朝廷から来ることを期待していたものの、彼を訪ねてきたのは善兵衛だった。善兵衛は「月や太陽がなぜあがりたい（とされるのか）という疑問を兼ね持っていたが、智者上人の類に尋ねてみても答えは得られなかった。そこで民間の富士行者である食行を訪ねたということらしいのだが、食行はこれを「下（庶民）より身禄の御世のこ
食行身禄の『添書』をめぐって

とを尋ねてきた」と解して喜んだ。月行が終生果たせなかったことを自身が果たした、と考えたようである。

そして、翌十六年の禅定を「一切の決定」と名付けて意気込み、富士山中の役人たちや水売りといった当地の者たちに書き出した『二字』を与え自説を披露した。下山したその夜、登山口にある下浅間（現・北口本宮富士浅間神社の仁王門の前にて荒廃を敷いて座っていたところ、「御山の一切の役人とも」と称される富士山の精霊たちが来て、仁王門に立てた「身禄の御世」を宣言する高札に対して尋ねたという。食行は「いかに分かつたものか仏元大菩薩の御ゆるしやうに」として彼らを承服させた。「決定」からこのように幻想的な記述が見られるようになり、「添書」ではその傾向がより強くなる。

『添書』が『二字』や『決定』と大きく違うところは、賤民身分や幕府要人、豪商・三井家への中傷と暴言に満ちていることである。それらの読むに耐えぬ誹謗は、無教養な庶民である彼が若年から行ってきた富士信仰、幼稚で偏った社会的知識が混ぜられた結果の所産である。その点で『添書』は食行の信仰人生の集大成と言えるかかもしれないが、決して美しく洗練されたものではない。人権を尊重する現代社会に生活する私たちはより食行の思想を支持するものではなく、誰彼かまわず口汚な罵倒で己をめなさいその人格を一本筒を通じて肯定的にとらえる意志が無いかを読者にお断りせざるを得ない。

それでも『添書』が読まれなければならず、理由は、ひとえに彼の自死を契機に、残された近親者たちが彼の遺品を利用した独特なる富士信仰を開発したこと、それがいわゆる（行行系の）富士講として近世半ばから近代にかけて盛んに行われたという、その後の歴史的展開にある。しかし、『添書』を読む限り、食行本人としては富士山
『添書』の著本

食行は自著を複数書き写しして親類や縁者に与えていた。二文、昭和初期に製作されたと考えられる模写本があり、模写の対象となった自筆写本は二本が現存している。また一本、昭和初期に製作されたと考えられる模写本があり、模写の対象とした自筆写本は二本が現存している。また一本、昭和初期に製作されたと考えられる模写本があり、模写の対象とした自筆本は写出上記一文のいずれでもなく所在は不明である。また、他に「添書」未尾と考えられる断簡が残っている。この他に、料紙数枚程度の短い無題文書が三点、書きは含めて書簡が四通、お身抜（角行系で用いられる神号を並べて富士山を表象したもの）が二点、一切の書簡がある。「決定」、また一枚の書簡があるが、別に食行次女の佔道が古筆切の様に分割して伝来している。しかし、書簡の製作年を明らかにすることは困難である。}

「添書」の自筆本は二点、書簡の製作年を明らかにすることは困難である。三点の書簡は一枚として、中間部分の脱著した名数は不明だが、二千五百字程度、全体の約四分の一が残されている。本文は半紙の長辺（二寸二分）を予め切っていたものに書きかかれている。料紙一枚
食行身禄の『添書』をめぐって

の短辺は長さが不揃いで、執筆前から縦に折れていたとみられる箇所や、前後を逆に巻かれていたのか、巻末に奥
へ行くほど大きくなる虫損があり、製作の前後を通じて粗雑な扱いを受けていたように想像される。題簽、神徳御
寶典（墨書）は汚れ具合から現在の装幀以前のものと思われる。巻頭にお身抜が書かれており、そこに「頂上杖
桑教之印」（「扶桑教天拜所」）の朱印三種が押されているところから、富士山中のおそれらの施設を利
用できる扶桑教傘下の富士講または御師が旧蔵していたと知られる。

自筆だけにテキストとしての信頼性は高いはずであるが、後世の写本と比較すると、同じ語句が近くに現れたた
めに眼移りを起こして写し飛ばしてしまった行や、「これよりしてわ」と写すべきところを「これしてわ」と書い
てしまったような写誤がある。また、別作者によるルビや修正の加筆があり、その点でも使用には注意が必要になる。

後世の富士講では食行を「元祖」として尊崇するにもかかわらず、「添書」を書写することはなかった。知る限り
、富士講による写本は埼玉県川口市地域にあった月三講の先達・安藤與左衛門が書きとしたものがあるのみだが前
半しか残存していない。私が調べ得た完全な『添書』写本は、以下に挙げるような全て不二道の信徒によるもので
ある。

一、小林家写本。恵行三文（中村久左衛門）、文化十五年（二八八）写。三重県所蔵。
不二道の創始者である禄行三志（小谷庄兵衛、一七六五—八四一）が伊勢の食行生家（食行の本名は小林某）
を訪問した際、同行の信徒たちに生家へ送られていた自筆本から書写させて残したものの（底本は所在不明）。自
筆本・他本の写本と比較して唯一、文の脱漏が全く無い。ただし語句や文字のレベルでは脱漏や衍字が多く見られ
る。
二、霜田家禄行写本。禄行三志、文化十年（二八三）写。川口市立文化財センター郷土資料館所蔵。

三、霜田家三次郎写本。霜田三次郎、嘉永四年（二八五）写。川口市立文化財センター郷土資料館所蔵。

三、霜田家三次郎写本。霜田三次郎、嘉永四年（二八五）写。川口市立文化財センター郷土資料館所蔵。
食行身禄の『添書』をめぐって

『添書』の研究史

『添書』には賤民身分などの激しい罵倒が含まれている。食行は江戸町人としては行商にて生活する軽商人であり、決して裕福とは言えなかった。その彼からして、公儀賤民身分に施策することは許せなかったらしく『添書』では口を極めて痛罵した。

富士信仰研究史上、このような表現が頻出する『添書』は敬遠されるか、またその後の記述自体が初めから無かったかのように扱われた。『添書』は、鴎谷市教育委員会、一九七六年にて、初めて翻刻された。この史料集に含まれる文書は当地の郷土史家で二道の研究家だった岡田博が全て翻刻し、『添書』は二と三を底本にしている。岡田は『添書』にある罵倒を巧妙に改竄した。例えば、三の一節にこうある（強調と中略は大谷による）。

その上に天子の我身の役目おもしろくずねびき払ったも後に毛ろ（にこしらえ金銀おもて着くわんら
おくそれ）にとらせ（中略）諸好く人諸商人ふのはらいとふもいたさすたミおいためあしひのあく生

15
の事にばかりかり、天子と日お初めをしておもてにあき、ぬみはかり、つちにけふごにみませ、けひ、おとし、こもし、にし、いり、のこしらえ、金銀おとし、てあく、わらね、おそれく

しかし、岡田は三の同じ箇所を以下のように翻している。

その上に天子の我身の役目でおしらべ、何にしていよいよにこしらえ、金銀おとし、てあく、わらね、おそれく

にとらせ、中略、諸人よ、諸商入とふのはらminoriをかえ、たみおいため、まあしりのあく生の事にか

り、天子日初めとして、おもてぬさのみちはかり、けし、こうにみませ、中略、したのものはすこしのことに

あるため、となおとし、まえじりのことに金銀おとしとられた。

次に添書は岩科小一郎、[富士講の歴史]（名著出版、十八八三年）にて翻刻された。この底本は自筆本と一であ

るが、岩科は「こちきり」「つちこちき」「せつこちき」をつとみにみせて（中略）したもののすこしのことに

三井家に対する中傷を「巻末に「駿河町かちやや主人三井家の初代について、卑賤の身でありながら権門に取

り入れ、かなり非道なことのないとして出て出世したことを述べている個所があるが、それが事実であったとしても、詫

誡のせりをうけかねないから省略した」として、「駿河町のかちややと申者は、いせ松坂のわきの□□□□□□に

以下百七十字省略」と伏字交じりに削除した。

岡田や岩科がこのような翻刻を公刊した昭和時代後期は、部落差別への糾弾が激しく行われた時代でもあり、彼

ら研究家たちや出版者が「誇誇のせり」としてそれらを大いに恐怖していったことは想像に耐えない。しかし、食

行の六道論説を借りた神話的世界観は、現実の身分階層を反映して四民のみを人間にする。賤民身分と博徒は観

悟道・畜生道・修羅道に比定され、人間として扱われていない。彼らを積極的に忌み嫌っている食行は「四民に入
食行身禄の『添書』をめぐって

(梅澤ふみ子は、食行の思想を語る根拠として専ら「不二道基本文献集」を利用した。彼女は「添書」を引用してこのように言う。)

ただしその洗練は、世が変わても社会構造が変わるとはまっとう考えず、『みよろくの世』でも天皇、将軍と四民だけが（すべての衆生）ではないことは明らかである。一九世紀の現代においても、こうして不正な翻刻テキストが歪んだ食行像を提供し続け、歪んだ食行研究が生産されていることを我々は悲しむべきであろう。
でも料紙を改めている。自筆本では料紙の脱落をはさんで後半が始められており、むしろ前半の後半分が脱落しているという言い得る。後半の冒頭、『南無元大菩薩様の此度子天子三日御前及び置毘仏事』とある一文をタイトルと解することもできる。

『添書』の分類を以下に試みよう。現状で最も欠落が無い小林家写本によれば、『添書』は無題の前半とそのようなタイトルを持つ後半との二つの長文より成る。前半一、全てに豊い子（S11S3）此元より六千年和南

二、既存の宗教と『身禄の御世』（S4S12）仁にぬめり（にょ…）

三、御仏人と神の『御役人』（S13S18）さてまた御仏の役人

四、食行の生い立ち（S19S23）がら八さ injustice を行

五、南無元大菩薩様の神勲（二）（S24S30）南無元大菩薩様の御…

六、食行が御役人となった後（S31S38）これよりしてわれしえ…

後半

七、二佛一體（S39）南無鍬僧行と申和元の…

八、天子天日への警告（S45）南無元大菩薩様の此…

九、享保十七年の東国見聞（S54）享保十七年子の五月…

十、南無元大菩薩様の神勲（二）（S62）天子の役目片ふり…

(522) 36
行行身禄の『添書』をめぐって

十一、食行辞世の五首（S8）

『添書』は、此世初りより六千年和南無願葉様の御住はい、この南無願葉様と申が元の南無願葉様の御事なりとして、創世より六千年は難と飢まる神が世界の支配者だったという神話から始められる。『二字』の神話で説かれた尊属の神々や今後『身禄の御世』を支配する南無願葉大菩薩様、そればかりではなく（元禄元年まで）万二千年にわたって支配した神道の神々や生き物全てを『みな願葉様の御子』であるという。【分科一】

人間の善悪はともに自らが創り出したものであり、自らに降りかかった善悪や病を「火災天狗そのほか神共」妖怪や神道の仏教の神々を指す『坊主山伏』に祈禱させる。人間はその利益不利益をも作り出すが、『ごらく生もの』（食行においては賤民身分を指す）『二字』参照に化かされて人のものを奪い当分よければよいとして地獄へ落ちる。このような。これに対して食行が「お通りのとおり」として提示する救済策は、賤民身分の者が勤勉に働いて四民になることである。元禄元年までは『天照大神宮』なる神が人の気性を和らげるために仏像を造った世界で万二千年続いた。『身禄の御世』においては五節句はそのままとして正月の松飾りをせぬとも構わず、朝夕に南無願葉大菩薩様への供物と称名を上げ、月のうち3・13・17・26の日を『御名日』とする。【分科二】

『御世を役人とも』は美女を集め、また妻女にも『まらしきもうらせ』（まらしき）は女性器の隠語、また食行においては女性そのものを侮蔑的に表現する語でもある、『耶よみの頭』は子を十日の佛に小姓へ差し出し金銀勘行を極めて『柳』を「松」に植え直し、天日（天下）を廃おうとしたが空しく失敗したという。食行は隠語をちから仕掛けを用いて政権を篡奪しようとした言いたかったようである。食行は当時の側用人政治を嫌悪してい
たらしく、鳥類類類のために人命を奪い、大名や旗本を金銀で懐柔したり色仕掛けで脅迫する彼を「おそろしさ

唐突に幕臣への批判が述べられるが、その現実の役人を対比されるべく続いて述べられるのが、「身もろくの御世

の御役人」として来る享保十八年六月十三日に富士山に登り、「その身体を捨てて、享保四年、東宮に転生した師・

月行と協力して懲懲し、以て身禄の御世を広げようとする食行の自死予告である。食行の言う「役人」とは「時に

超常的な能力を持つ霊的な生物を意味する語であり、「二木」から用例がある。」（分校三）

食行はしばしば、「やれにとの御願に」と末尾にけのメッセージとして主張する。これらがどこま

で他律的なものかはともかく、この科にあるお願にを要約すると、①火を忌む習慣の軽減、②一木に道坊主山伏

し」として一括で表現される職業的宗教者たちを両御山（富士山の他に江戸にその写しを造れという）に近づけさ

せず彼らを四民に編入すること、③神以外に盗をしないものはないのでこれを赦し、天子天日（天皇と将軍）

（524） 38
以下、各自の家職（四民）を務めることの三点である。ただし、②と③についてはそれぞれ表現を変えて繰り返している。（分科五）

大善隆様になる。この「身禄の御世」でなされる宗教的行為は「おきながい」、「直願い」という神に直接届くもの「まことのミチ」なるものが食行の主張であることは言うまでもない。従わないものは、世界の果てにある。この「天倫大神宮」の時代のそれは「かげねがい」、直願い、という神に直接届くものである。「天と一体のけつつもある身ろくぼさ」であり、一筋にまことの道を願うようにという。この「天倫大神宮」の光が届かない辺境に魂ののみの状態で万劫にわたって留置されるという。この「天倫大神宮」の意味を追究して、鳥居に至る世界の霊妙さを体感したことを表明した。（分科七）

後半は、前述の通り冒頭の「南無仏界大善隆様の此度天子天日及び御伝え置候御事」をタイトルとして読むことも
できる。「天子のあやまり」で天皇を糾弾するに、月行が元禄十二年に関白邸（当時の江戸）を訪れた際、関白は近衛基煕（へむけ）を請願したものの相手にされなかったことをに対して、「天地の役人である」と申し立てた生物を便乗し、その中でもかミダツモノのばかりよきやうにいたし、しものものわすをしたこともあらためてとがおとし、あっただけに、金銀おもせかあすうよういたさぬようにいたし、米も三石余迫になり候御はさつお七八斗迫に高直に上り、米下直に売り候は越度に被仰付候やうにくわん八州も米出さぬようにおふれなかしたみのいたおおたまきた本来を同じくするのでにあり。したがって、米飯を勝手に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米を入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米を入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米を入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米を入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米を入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米を入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせ、また江戸にて安売りしては貞民身分に金銀を浪費すること、そして関八州から江戸に米入れずに値上げさせる。
食行身禄の「添書」をめぐって

戸町奉行所は奥州と関八州に対して江戸表へ米を回送することを禁じた。幕府にとって、米倉の下落は年貢の価値を低下させ米を俸給とする武士の困窮を招くので阻止しなければならない。食行の怒りは自らの宗教観と江戸市中での町人生活のみから得られたもので、刻々と変わる時勢を考慮して論じられていない。そこで庶民として経済を語ることの限界がある。

とかもか、現実社会に心を痛めた食行は「六十八八歳の志やうれ」とも言わし、六十三歳にして丑の六月十七日お名日としてとる天から三月にあたる方こうの三桟のか、ミに被敵参り候として、六五歳の寿命を短縮し、三歳即ち享保十八年の禅定にて、富士山頂にて「万劫の峰の鑓」なることを決めたのである。（分科八）

食行は享保十七年五月に日光を始めとする北関東を周遊した。『決定』に収録されている和歌に「小泉氏」即ち当時食行一家を居候させていた下級武士の小泉文六郎によるものがあり、これは松野善兵衛は下野国那須郡松野村（現・栃木県那須郡那珂川町松野）の出身なので、彼の故郷を訪ねるようなものだったのかもしれない。日光では現地の役人に何かと銭を要求されたことに憤慨しており、この様子を「銭とりのまつりことにて和、源の宗春か一くわんの書物」なるものを持ち出して非難している。おそらく「東済渡」とはこの旅行を指し、供をしたという松野屋善兵衛は下野国那須郡松野村（現・栃木県那須郡那珂川町松野）の出身なので、彼の故郷を訪ねるようなものだったのかもしれない。
短い時間のうちに見る事は難しいであろう。このように不可解な点はあるが、「のちわちちもあるかれぬように
さみなくせばうけた道をあるくにも何先を見るやうに成り」（S73）と合わせて、「温知政要」の第1法令多く過れば人のこと
のまっつけに他ならなう。食行は「温知政要」を読み直していった可能性がある。ただしさ美もしょくのとき
食行は会津領・宇都宮領・水戸領・真岡領・下館領について、その政治を論評する。関者を善政の例、後も二
つを悪政の例として挙げているが、具体性に乏しくいずれも伝聞を基にしていっているように読める。これ
行の評価基準は、領主が百姓に米をどれだけ施したか（宇都宮領なら三万俵、水戸領なら八万俵を施したとい
ということく、これ源の宗春の書物のとおり、すみく道いきと、かさなるものにて聴聞、いくへんもこめね
おれよ、たにせつの仁人がおむさとしおきにいたさのうようにとの御従来（S60）とあるように、みだり
なってながめの申候を、天子天日に上げるものわしづかのりりかせ、ごのうろくく道も天地のあたために生あ
るほどのものおあわれみなこ、おおろくにいたさを候を（S61）と神の役人として為政者たちに善政を施さ
せる意気込みを見せる。（分科九）
食行身禄の『添書』をめぐって

自筆・写本を共にして、S62の行頭を「己」として箋条書するような形になっているが、ここ以外にはそのような箋所は無い。以下に、その「お伝え」という箋を要約して列挙する。

① 天子が誤っていることは皆知っているので、この三つおりの御仏笑のかきもの（一字）、「決定・添書」を見合わせて衆生が助かり繁盛するようにせよ。

② 『紀伊国御家』（徳川吉宗を指すと思われる）の悪政を各国に持ち込む、藩札を不当な比率で交換したり穀留めをしして穀物の値段を吊り上げるような政策をするのでは、世界の辺境に魂のみにて留置する。

③ 米の値段を吊り上げた「かまあげ」（享保の飢饉時に幕命で米値調整を行っていた豪商・高間伝兵衛を指すとされる。高間の商店は打ちこわしで破壊された）と彼を召し抱えた彼人は世界の辺境に魂のみにて留置する。

④ 天子が済民へ転生しないように、『源の宗春・くわんの書物』の志がいつまで変わっていないように万劫、天子よ

⑥ 『源の宗春・くわんの書物』の志がいつまで変わっていないように万劫、天子よ

⑦ 光も世界の辺境に魂のみにて留置する。

この三つおりの御仏笑のかきもの（一字）、「決定・添書」を見合わせて衆生が助かり繁盛するようにせよ。
幕府の経済政策に合わさっていないことは前に述べた通りである。

⑨の前に、「駿河町の姿三四郎」（豪商・三井高利を指すとされる）への駄倒が述べられている。食行によれば、彼は伊勢の貧民出身だが、足を洗って人間になった。伊勢で三六万両を借り集めて踏み倒し、その金で現金安売りの商法を始め賑やかな商人・諸職人を泣かせた。そして公儀役として京に居を構えて三井と名乗って天子の服を扱い、天子の身も金銀も衣服も絵していた。という。食行は著作を通じて貧民に「四民に入れ」というもの、あしだれに仁じんけんになり候ま」という三井を「ねんちう天日の中けかれてか、り、金銀ふけもあっただん左衞門がいふく金銀もうなしえようにねかえいる事なり」と指弾しているところを見る。その主張の割に、生まれたことがあるのではないかと考えて得る。悪意ある中傷もそういいう現実的な状況のもとに語られているのではなかいか。

本文は「これよりしてわくわくぞ見ねえんりょうも、いよいよ見えて見えて見えて見るところを見ると、その主張の割に。生まれたことがあるのか、考えてしまう。うるさくて、いままですびはどこかの申たち考え、まひ申も和これなく候。そのままに我がと通してえここぞごの申らため役人となって参るなり」として、食行の自死予告で締めくくられる（分科十一）。貰貯や祈念祈禱も構わなくなるという「心をマコトに持つ」として、即ち食行が今まで神勲として推奨した事柄を遵守することである。その行為の裏打ちとして万法の衆生が助かり繁盛するように、食行は万劫にわたって富士山頂にて世界を監視し続けるのである。

本文の後には、写本によれば「つねきのこのかきものおち出で天子天日ヲひらかせミョ」他、五首の和歌
食行身禄の『添書』をめぐって

おわりに
食行を富士山頂へ駆り立てるもの

私は、食行の自死を『入定』と呼ぶないようにしている。「入定」は対語に『出定』を期する仏教語である。

例えば、弥勒菩薩が遠い未来に成仏して下生するので、それを待つべく高野山奥の院で空海が『入定』している、という表現が成り立つ。饒華三会の暇に、空海は定から出て弥勒菩薩にまみえるであろうから。しかし、神の役人として世界を永劫に監視して悪人を懲罰しつづけるであろう食行に、その語はそうわけではない。食行は富士山にて超自然的な存在になりろうとした。月行や食行に言われば、元禄元年以来、既に世界は『くらくおいつく』とわばふのやま六十あまりに身らくにうめつ（入滅）（小林家写本）と訴む。今まで見

南無元大菩薩様の支配下にある。当然、三百年以上を経過した現代ですらそうである。おそらく、食行の意識としては死のうとしたのでなく、肉身を捨てろくらいの気持ちだったのではなか。しかし、如何なる倫理があって、富士山で死ぬことによって『役人』になれるとか、ということを彼は述べていない。

東宮（二字）の記述からは桜町天皇のことと推される。に転生したという月行は、おそらく一般的な江戸町

45 (531)
人として没した。もし神の付属が食行の言う通りに月行同行に対して行われるのであれば、食行も普通に江戸市中で没した後で神の役人になるのではないか。それなら、既に彼らの神が世界を支配し新しい神代となった以上、『添書』で『お仏様』として神が動さられたことは、本来動すべきならなかったのはないか。

しかし現実は新しい神代の到来を実感させるものではなかった。例えば彼が「かみだつものばかりきやうにいたし、しごものわすこしことでもあらためてがにおとし」というような状況は、おそらく彼が貧しく社会的な地位もない江戸町人として生する現実から得られた不満に違いはない。米が安くいくらでも賃えるようにという発想も、自らの神話をもつり合うごく庶民的で生活に根差した願望だったものなので、実際の米販は彼の知らないところである。

月行は延宝八年（1680）、台風によって江戸の本町が吹水する水害に居合わせ、江戸前の海が大山の如くに盛り上がるように、「此波来ル時は日本かいろ卜成との御直そうなり」と神威の顕現（御直相）をみた。食行においては、「決定」から『添書』にかけて、例えば富士山の精霊たちが彼を訪ねてくるような、自らの神話世界で自身の地位が高まっている想像的な記述が増え、彼らに対して自らを「山の主」と称するような、自らの神話世界で自身の地位が高まっているという自意識の肥大化が見られる。月行が関白邸に三度足を運んで門前払いされた後に京で災害が起きたことを、「文字」では単に「天地の役人共あばれ申すに」としか書かなかったところを、『添書』では「天地の役人共にこしたらへさ候為共」（傍線）で大意を含めてある。

めつけが享保十五年の富士山頂で「三ごくのしたいわ一心相転」と開く転回を得たことに他ならない。
食行身禄の『添書』をめぐって

これらの数年間の短い時間に観光してきた神の世界への思いは、言い換えれば、彼が六十の齢になるまで神の顕現を見るために断念してきたことを意味している。彼の日常的な神経生活は説え難い、のどがらす感じさせるものだった。

しかし、日常の礼拝に神が降臨するわけではない。ましてや災害に乗じて非日常的な顕現が見られるということもない。

食行がそのような人生に、神に付嘱された同行の一員である自覚を長く保ち得たものだろうか。

食行には、焦燥ともいうべき、上手くいくはずのものがそのようにになっていないことに起因する積年の感情があったのではないか。不満と貧窮に満ちた生活の中、かつて願えたのがだれなのか。上手くいくはずのものがそのようになってしまい、それを受け流す余裕もない。

食行を長く持ち得なかった新しい神代への実感もあるとすれば、それは『方法の衆』ではなくて食行自身だったのではなかろうか。彼が富士山で死なれた理由を考察したものである。「添書」の内容が写本の状況を交えて吟味されたことは、知る限り今まで無かった。整えられた翻刻とすらも未だに公刊されていない。そこに内容や表現をめぐる現代社会ならではの事情があったことは既に述べた通りである。整えられた翻刻の提供はおそらく私に課された務務となるであろう。富士講の主張や現代の研究においては、漠然と、彼は救世のために富士山で自死したと言われてきた。しかし、彼が死ぬことと救われることのあり方、彼が富士山で死のうとした理由を考察したものである。「添書」
食行身禄の『添書』をめぐって

前掲富士講の歴史、五三一、五三二、五三四頁。

宮崎ふみ子『富士への祈り』江戸富士講における救済観の展開。（富士山と日本人）青弓社、二〇〇三年、三六〇一三〇頁。

大学附属図書館所蔵『扶桑国御祭神』の史料紹介を兼ねて。（東京大学経済学部資料室年報）第三号（平成二十四年度）、二〇〇〇年。
Why Did Jikigyō Miroku Choose to Die on Mt. Fuji?

ŌTANI Masayuki

Jikigyō Miroku (1671–1733) was an ascetic belonging to the Mt. Fuji confraternity founded by Kakugyō. Jikigyō wrote three works before committing suicide on Mt. Fuji. His last work (without an official title), is commonly called the Soegaki (『添書』 accompanying document to his work). The work details the reasons why he wanted to commit suicide on Mt. Fuji.

Jikigyō followed his master, Getsugyō, since the age of 17. Getsugyō received an oracular statement from a god, who Jikigyō believed dominated the world since 1689. Jikigyō inherited the teachings of “Miroku no yo (the era of Miroku),” which was advocated by his master. He developed, through his works, the details of the world view exposed by Getsugyō. Jikigyō, on the other hand, became frustrated with reality, in which there was no divine manifestation and also with his unfulfilled daily life. This paper considers the manuscripts of Soegaki in light of his life. I will also discuss how his claims resulted in his suicide.